

一席お付き合いを願います。

【庄屋】「いやいやいや、芭蕉先生、結構な句をいただきましてありがとうございます。この岩沼で一番のお社、わが竹駒明神の武隈の松を、こんなに素晴らしく詠んでくださるとは。『桜より松は二本を三月越シ（みつぎごし）』——まさに名句でございますなあ」

【芭蕉】「ええ、お庄屋さん、ちよいとかがいますがね。あの、こちら岩沼には、もう一つお社があるとうかがいましたがね、たしか水神様、水の神様だと——」

「ああ、金蛇様のことですね」

「ほう、金蛇様。面白そうですね」

「昔むかし、源平合戦より前の話ですがな、京都のさる刀鍛冶が、御天子様の刀をつくれと言われまして、いい水を求めてこの岩沼まで来たそうなんです。いい水が出ていたそうですよ。」

早速水神様に祈願をして、炉を構えて刀を鍛え始めたんですが、ビッキたちが邪魔をしましてな」

「ビッキ？ ビッキてえのは何のことです？」

「こつちの言葉で、蛙のことです。まあ朝から晩までゲロゲロゲロうるさく鳴いてる。刀鍛冶は心が乱れて、よい刀が打てない。そこで金（かね）でもって蛇をつくって、それを田圃に放ったところ、蛙はピタツと鳴き止んで、無事素晴らしい刀を鍛え上げることができたそうなんです。で、ありがたいてんで、水神様に蛇のお姿を献納して都に帰ったって——そういう言い伝えがあるんです」

「ほう、それは面白い。ちよいと寄ってみようかな」

「いえいえ、先生、先生の様な風流な方がお寄りになる所ではございませんよ。この金蛇様は金運の神様でしてな、我々下々の者、商人やら職人やらが、行くところですよ。『どうか金回りがよくなりますように』ってんでお参りに行きましたな、蛇紋石という蛇の姿が浮かんている石に財布だ紙入れだをこすりつけると、金が増えるなんという——まあまあ、そういうごく俗な所で、風流な芭蕉先生のような方はとてもとても——」

「……はあ、そうですね。わかりました。ええ、はい、では、もうひと休みしてから、仙台のほうへ向かいますから。はい、どうも——（と見送る。）

（下手右横へ）おい、曾良、曾良よ」

【曾良】「はい、先生。何か御用で」

「今からちよいと出かけてきますよ」

「先生、お一人で——」

「いいんだ、いいんだ。すぐに戻るから、お前はここでのんびりしていなさい——（と歩き出す）

ええとと……ずいぶん歩いたが、このあたり——ああ、そうだ、幟旗が立ってる、あそこが金蛇水神社だな。

あたしだって、金はほしいよ。よく勘違いされるんだ、俳諧師は俗を嫌って風流で、お金なんか気にしないでまるで仙人のように暮らしてるんじゃないかつ、て——冗談じゃないよ。お金ほしいよ、お金。この奥の細道だって大変なんだから。こないだの飯坂、大変だったよ。路銀を節約しなきゃって、農家に頼んで土間で寝たんだから、曾良と二人で。雨漏りはするし、ノミがいるし、蚊はうるさいし。

ねえ、金さえあればね、そんな思いしなくていいんだ、いい宿に泊まれるんだから。金運を上げてもらいましょう、この金蛇様にね。

まずはお参りだ。あーそっか、その前にお賽銭か……金運上げてもらうためにお賽銭ねえ……まあ必要最小限の先行投資ってやつだな。一文銭でもいいだろう。少ないけど許してくださいよ。

(財布から考え考え小銭を出して、投げ入れ、二礼二拍手) ええ、金蛇様、あたくし松尾芭蕉の金運をあげてくださいまし。路銀に困っております、たくさんお金をくださいまし、楽な旅をさせてくださいまし、ね、いい宿いい酒いい女——ちよつと俗になり過ぎたな、とにかくお願いいたします(一礼)

さてと、ほーお、これが噂の蛇紋石だな。なるほど、石に蛇の紋様が浮かび上がってる。これにこの(懐から財布・手拭いを取り出し)財布を擦りつけるんだな。

待てよ、この蛇紋石。たくさんあるなあ。(指さして数える) 1、2、3、4、5、6……15個もあるよ。どれがいいのかな。

あーこの、右から三番目の石。この石、頭のところがやたらピカピカしてるなあ。たくさんの方が擦りつけたんだな。うん、ということだ、これが一番ご利益があるんじゃないの。だからみんなが擦りつけて、こんだけピカピカつるつるに——じゃこれだ、これに(と財布を近づける)——と、待てよ。みんなが擦りつけてるってことは、もうこの石の金運、みんなが持つてっちゃったとも言えるねえ。その左の四番目。これなんかまだちよつと石のゴツゴツ感があるね——こつちの方がまだ金運がたまってるんじゃないの。じゃあこつち——(と財布を近づける) あ、待てよ。どれか一つって言うより、これ端から順に15個、全部に擦りつけちゃおう。そうしよう、そうしよう。(財布を順に擦りつけてゆく) じゃあ行くぞ。あ、すりすり、すりすり、すりすりすりすりすりすりすり……つと、やったよ。これで金運15倍だ。ありがたいありがたい(と懐へ財布をしまう)

【蛙A】「おたの申します、おたの申します、芭蕉先生、芭蕉先生っ！」

「おつ、何だ何だっ、蛙がいるぞ。蛙が、蛙が、人間の言葉をしゃべっているぞ」

「いえ、それ違うんです。私が人間の言葉をしゃべってるんじゃないやありません、先生が蛙の言葉を理解できるようになっているんです」

「いつから？」

「たった今、あたしが魔法を掛けました。シャランラって」

「シャランラなのかい。まあいいが、そうかい、蛙と話せるのも面白いな。蛙さんが何か用かい？」

「先生、あたしはこの辺りの蛙の頭をしています、ビキ衛門と申します。きょうは先生に一つお願いがございまして。あの、あたしたち蛙と金蛇神社のかかわりについてはご存じですね」

「ああ、さっきお庄屋さんから聞いたよ。お前さん方が刀鍛冶の邪魔をした蛙の子孫だね」

「そこなんですよ、そう言われてるんですけど先生、考えてみてくださいよ、ここはそもそも私たち蛙が住んでたんですよ。この水は水神様と私たち蛙が守ってきたんです。それを後から来た刀鍛冶が横取りしたんじゃないですか。百歩譲って一緒に使うならいいですけど、私たちの先祖様をうるさいって。ねえ、蛙の鳴き声くらいで精神乱されてんじゃないやねえよ、って思いませんか？ それで刀あ打たないで、金物の蛇をこしらえて、それでご先祖様に意地悪して」

「そうだね、お前さん方蛙は蛇には弱いものね」

『ビッキの神社』

「いや先生、お言葉ですが、弱いとかそういうんじゃないんですよ。別に蛇なんか怖くないんです。それこそ屁みたいなもんですよ、我々蛙は蛇なんか恐れたことは一遍もないんですから！」

「ほーお、そうかい…（やにわに地面を指さし）あつ！ 蛇っ！」

「（目をつぶって耳をふさいで）ごめんなさいっごめんなさいっごめんなさいっ！」

「——やっぱり怖いんだね、嘘だよ」

「う、嘘う？ 先生っ！ そ、そういうのやめてくださいよ。寿命縮まりますから。いえいえいええ違いますよ、怖がってるんじゃないで、これもう何と言うか、体に刷り込まれちゃってるんで」

「悪かったね、それで？」

「だから、我々も蛙神社をつくらうかと」

「（きょとんとして）——ずいぶん突飛な展開だね？ どうして神社を？」

「だって、こつちだつて神様扱いされたいじゃないですか。ねえ、神様扱いされて、お参りの人をたくさん集めて、ご先祖様をいじめた刀鍛冶と金物の蛇を見返してやりたいんですよ」

「なるほど、なるほど——うん、それであたしに何を手伝えと」

「先生、神社には縁起つてもんが要りますでしょ。謂れ因縁故事来歴てえやつですよ。それに先生にご登場いただきたいんです。先生は名高い俳諧師、この神社はあの俳諧師・松尾芭蕉と蛙たちが創つたて、そういう話にしたいんです」

「あつははつは、それは愉快だ。あたしが神社の縁起にねえ。うん、喜んで引き受けましょう」

「うわー、ありがとうございます。ありがとうございます。これ、御礼です。受け取ってください（と錢を差し出す）」

「え？ ああ、そんなことうしなくていいのに——一文銭かい。気を遣ってくれてありがとう」

「いいんですよ、気にしないでください、さっきのお賽銭ですから」

「駄目だよ、それは」

「というわけで、お願いしたいんですが、我々もどういう神社にしようか色々考えまして。こんなご利益のあるこんな神社っていうご提案がございます」

「ご提案はいいな。どんなのがあるんだい」

「考えたものから先生にお話しします。オイ、みんな集まれ」

「おお、おお、たくさんの蛙さんたちだ、たしかにこれはうるさいな」

「ああ、この人が芭蕉？」「へーえ、結構爺いだな」「大丈夫なの、こいつで？」「おい芭蕉、何とか

言えよ」「芭蕉っ」「芭蕉！」「芭蕉おお」

「はっははははははは……（やにわに）あ、蛇っ！」

「ごめんなさいごめんなさい」「ごめんなさいごめんなさい」「ごめんなさいごめんなさい」

「やっぱり怖いんだね」

「ええ、先生、失礼しました。じゃあまずビッキ之助」

【蛙B】「ええ、ではあたくしから。おほん、わたくしは『生き蛙神社』というのをご提案します」

「生き返る……そりゃいい名前だね。ご利益もありそうだ」

「はい、この神社にお参りしますと、元気が漲って健やかにになります。気持ちも体もすっきり爽やか、まるで生き返ったかのようなのです」

「ふむふむ」

『ビッキの神社』

「お参りの前に手を洗う手水、そこが温泉のお湯になっています。足湯ならぬお手湯でほっこりしてもらったら拝殿に上がって御参拝。御神体の蛙像の裏へ回るとなんと、そこに源泉かけ流しの温泉があります。脱衣場で着物を脱いだらどぶんとつかって体の芯から温まります。『失礼します』という声と共に入って来たのが、薄布をまとったお巫女さん、『お体お流ししますね』と言って垢すりでもってあなたの体を洗い始める、首、肩、胸、背中、腹、そしてやさしくヘソの下三寸を——」

「何か違うんじゃないかい、生き返り方が」

「回春ってやつで」

「それはどうかな。そもそも大変なお金がかかるだろ」

「ええですから、一人一両くらいの入浴料をとりまして」

「言っちゃってるから、入浴料って。ちよいと行き過ぎだよ。それは」

「そうですか。じゃあ次、ビキ太郎」

【蛙C】「押忍。ではわしの提案、『若蛙神社』を申し上げます」

「大丈夫かな、これもさつきみたいなき感じだけど」

「いたって健やかな神社であります。年齢を重ねて疲れてしまった体、草臥れてきた体、緩んだ体とさようなら、もう一度若い頃の体を取り戻せるというのがご利益で」

「うん、いいねえ。お年寄り向けだ」

「はい。そもそも蛙は昔からお年寄りを敬っています」

「そうかい」

「はい。ケーローケーロー（敬老、敬老）」

「うまいね。で、どういう神社なんだい？」

「まず神社へ向かう石段、これが三万八千段あります。これをうさぎ跳び：いや蛙跳びで昇ってもらいます。最初に足腰を鍛えます。鳥居は鉄棒になっていまして、ここで懸垂三百回、拝殿の鈴は奈良東大寺の鐘と同じ大きさ重さ、これを百八回鳴らせば上腕二頭筋もバツチリ。二礼二拍手一礼これを千セット、これで腹筋背筋を鍛えまして——」

「もういい、もういい。鍛えてるうちに死んじゃうでしょ、そんな無理させたら」

「これも駄目か。次は——ビキの丞」

【蛙D】「ええ、『無事蛙神社』というのを考えました」

「ああ、いいねえ。旅行安全、道中無事でえやつだね」

「でも、思っただんです。この無事蛙神社に来るときの無事は誰が保証してくれるのかと——」

「たしかにそうだね」

「だから取り下げます」

「そうかい」

「次、ビキ丸」

【蛙E】「負け続けの負け犬人生とおさらば！……ここで一発大逆転！——っていうのがご利益で」

「ほう、神社の名前は」

『「ひっくり蛙神社」！』

「あんまりよくないね」

【蛙A】「先生、どれもお気に召さないようですねえ。あとはこれ、残りのやつを見てください」

『ビッキの神社』

「ああ、書いてくれたのかい。ええっと、迎える、控える、つかえる、入れ替える、静まり返る、間違える、見違える、すぐすご帰る、お安く買える——なんか悪い方が多いね。どうでもよくなってきたるねえ——おお、これはいいね、サカエル神社、繁栄するの『栄える』神社だ。岩沼の地の繁栄を願う、サカエル神社はいいんじゃないかい」

「あ、気づいてくれましたか。それ、実はわたしが考えたんですよ。じゃあ神社の名前はサカエル神社で！」

「字はどうしようかね。あたしは酒が好きだ、酒に蛙でサカエルと読ませるのはどうだい」

「ああ、それ駄目なんですよ。あたしたち蛙は酒は駄目なんです」

「そうかい」

「ええ、ゲコ、ゲコ（下戸、下戸）で」

「じゃあ字面は任せよう。」

うん、それからね、これ、一筆書きましよう——岩沼が栄えるために——（矢立を取り出して短冊に一筆書く）ほら、これをやろう」

「え、先生のご真筆、ありがたいなあ。ええっと——」

『古池やかわず飛び込む水の音』

ああ、いい句だなあ。これ私たちのことですね。ええ、このあたりには古い池もありましたよ、まさに岩沼の蛙、岩沼のビッキの句ですね。先生、あたしたち岩沼のビッキのために、こんな、こないない句を……（と涙ぐむ）

「（やや戸惑って）…ん——ん、まあまあ、泣くことはないよ、とっておきなさい」

「御神体にしちゃいます、これ。おい、みんなで御礼を言おうぜ」

「先生、ありがとうございます」「先生、ありがとうございます」「ありがとうございます」「ありがとうございます」「ありがとうございます」「ありがとうございます」「ありがとうございます」

「（うるさそうに）ああ、はいはいはい、ああ、ああ——あつ、蛇っ！」

「ごめんなさいごめんなさい」「ごめんなさいごめんなさい」「ごめんなさいごめんなさい」

「かえってうるさかったか」

「先生、また岩沼に来てください。サカエル神社、必ず我々岩沼のビッキの手でつくりますので」「うん、楽しみにしてるよ。はいはい、じゃあな、あたしはこれで、みんなも帰りな。うんうん、ここで、お別れだ。ああ、みんなチャポンチャポンと水へ飛び込んで——ふふ、ふふふふ」

【曾良】「先生、先生」

「おお、曾良か。来たのか」

「はい、そろそろ立つ頃かと思いましたが——一部始終を見ておりました」「ははは、そうか。話はわかったか。わかった？ はは、お前にも魔法がかかっていたようだな」

「先生、あの句は三年ほど前、深川芭蕉庵での句合わせ、蛙合（かわずあわせ）で詠まれた句、この岩沼の蛙たちのためのものではございませんでしょう。古池は芭蕉庵の池で——」

「うんうん、あたしもね、言おうと思っただが、あんなに喜ばれちゃなあ…言えなかったよ」

「黙っておきますか」

「黙っておこう——イワヌマ花（言わぬが花）だ」